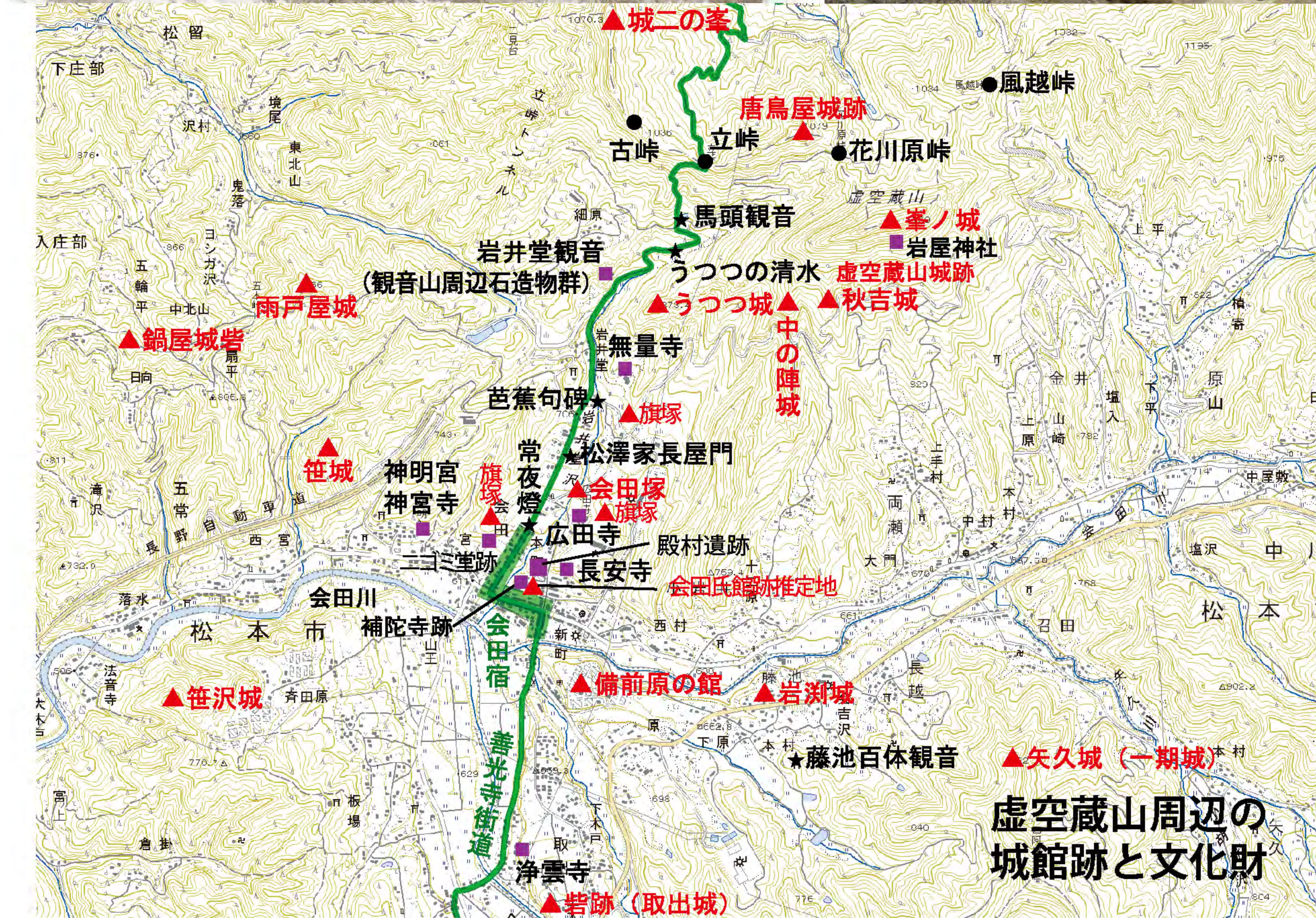




虚空蔵山城跡の鳥瞰イメージ
(宮坂武男作図『図説山城探訪』より)

殿村遺跡の石積みと平場



4 まとめ

水ノ手周辺に存在しているひな段状の遺構は、大規模な土砂の移動と版築工法による盛土、壮大な石積みの築造など、大量の労働力を投入して、大がかり、かつ綿密につくられたものであったことが分かりました。

その時期は、出土した陶磁器の特徴から16世紀を中心とした戦国時代と推定されます。しかし、今回見つかった遺構は、虚空蔵山城の最後の姿を見せているにすぎず、城としての歴史がより古くさかのぼることは間違いありません。

また今回は、虚空蔵山の信仰的な側面を示す、決定的な遺構や遺物は見つかりませんでした。

それにしても、通常、尾根や山頂に築かれる軍事施設としての曲輪に対して、谷部に存在する大規模なひな壇状の平場は、いったい何の目的でつくられたのでしょうか？この場所に限っては、戦いよりもむしろ居住の場としての意識が感じられ、それがこの場所の性格を解くカギのひとつになるのかもしれない。

松本市教育委員会では、来年度以降も調査を継続し、水ノ手周辺の遺構群の性格を明らかにしていきたいと思えます。今後も、調査事業へのご理解とご協力をお願いします。

虚空蔵山城跡

—「水の手」周辺の発掘調査—

平成24年9月・松本市教育委員会



虚空蔵山と会田宿

1 虚空蔵山城跡とは？

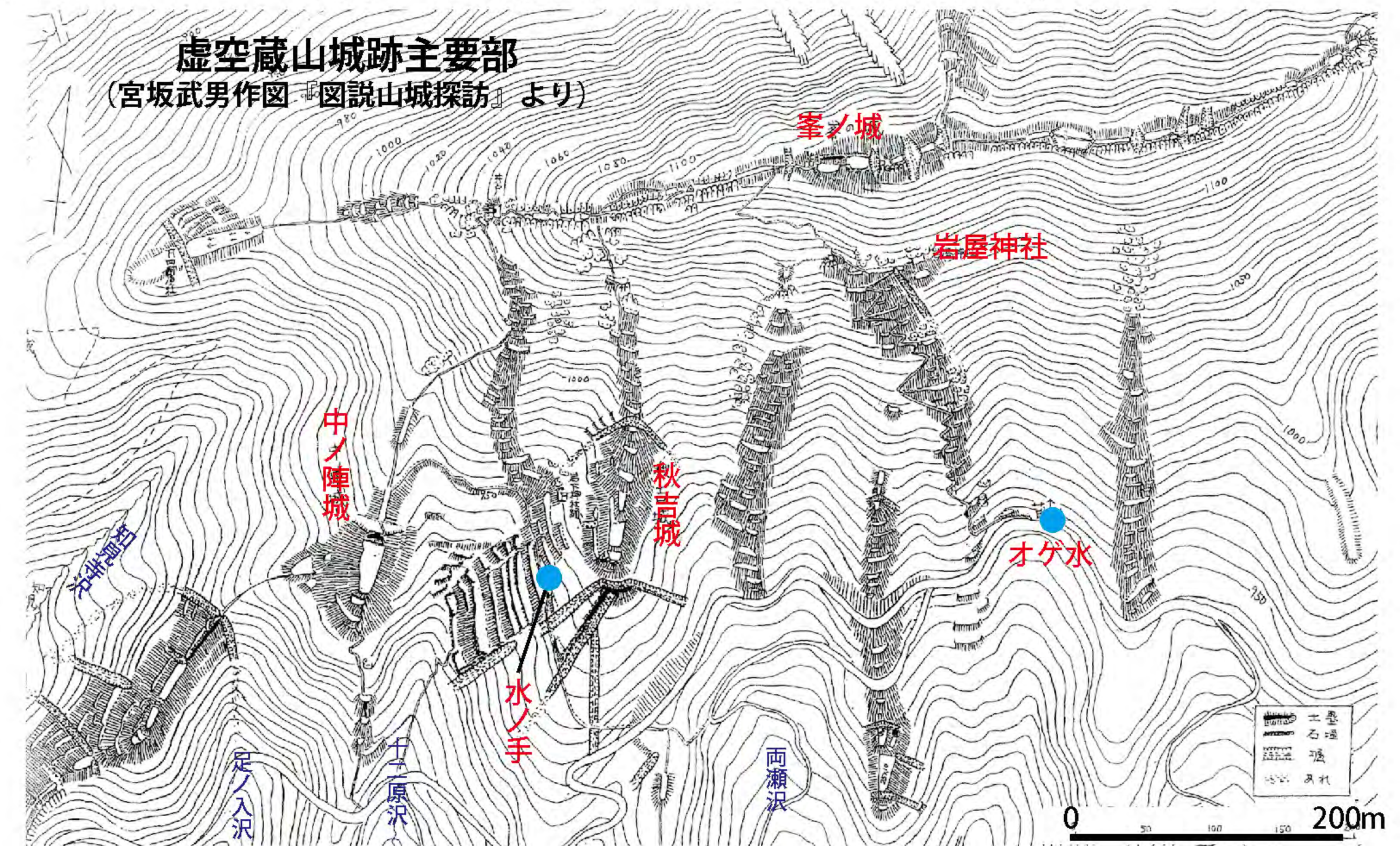
(1) 信仰の山としての虚空蔵山（こくぞうさん）

「会田富士」の名で親しまれている虚空蔵山は、標高1139mの美しい山です。山頂や山腹には巨岩や湧水がいくつもあり、大昔から人びとの祈りの対象でした。その信仰がやがて修験道や仏教の流入により発展し、一帯に宗教的な空間が形成されたと考えられます。山腹の岩屋神社や、山麓の会田周辺に集中する古い寺院がそれを物語っており、平成20年から調査を実施している殿村遺跡も、中世の寺院跡と推定されています。

(2) 虚空蔵山城の時代

虚空蔵山は、会田盆地の北、筑北盆地との境目に位置しています。その麓、交通の要衝である会田の地は、鎌倉時代には東信の滋野氏の一族である会田氏の支配がおよび、殿村遺跡周辺に居館を構えたと伝えられます。会田氏は一方、この地にあった伊勢神宮の所領、会田御厨（みくりや）の経営にも当たっていました。

虚空蔵山城跡は会田氏の詰めの城とされ、山頂や南側の山腹に数多くの曲輪（くるわ）が築かれていますが、築城がいつはじまったのかはわかっていません。ちなみに古文書に登場する虚空蔵山の記録は、天文22年（1553）に武田晴信（信玄）が会田盆地南部の荻原原城を落した時、「会田虚空蔵山まで放火」したのがはじめてです（「高白斎記」）。これにより会田氏は武田方につきます。武田氏滅亡により上杉氏の勢力下に入った後、天正10年（1582）には、深志を回復した小笠原貞慶の侵攻によって、ついに会田氏は滅亡します。その最後の戦いは、会田川をはさんだ対岸にある矢久（やきゅう）城（一期城）と言われています。



(3) 虚空蔵山城の特徴

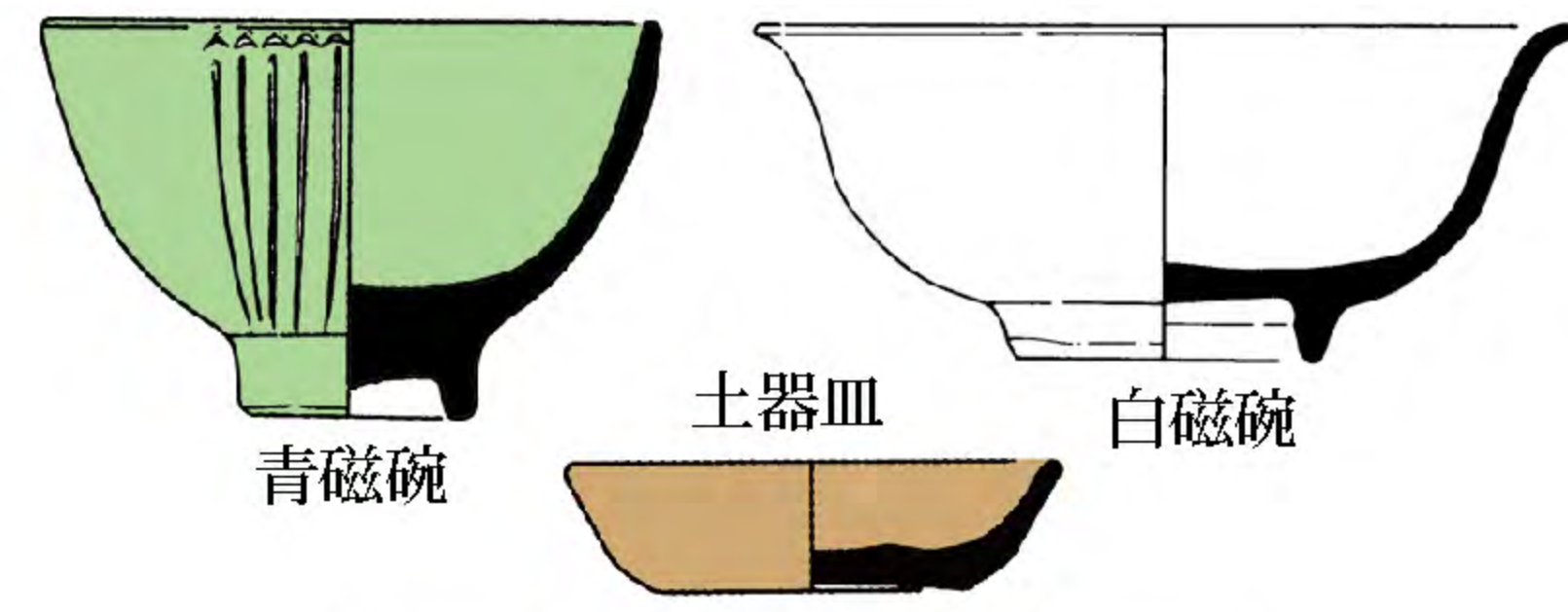
山全体が城と言っているほど壮大な構えです。稜線を堀切で分断した曲輪が連なる山頂の「峯ノ城」や、山腹の尾根に築かれた「秋吉城」や「中ノ陣城」などの曲輪群で構成されています。中ノ陣城は、石積みめぐり曲輪の背後に大きな土塁と堀切を設けるなど、山辺谷の小笠原氏の山城に通じる特徴を有しています。

こうした尾根や稜線上の曲輪に対して、秋吉城と中ノ陣城の間にある谷部、「水ノ手」と呼んでいる湧水の周辺には、石積みをともなう大規模なひな壇状の平場群があり、通常の山城とは雰囲気の異なる空間となっています。しかも、秋吉城からのびる3本の堅堀と、堀に沿って築かれた土塁によって隔絶されており、秋吉城と中ノ陣城によって堅固に守られた、重要な空間だったのではないかと考えられます。

2 発掘調査の目的

この発掘調査は、虚空蔵山麓の歴史の中で、殿村遺跡と虚空蔵山城跡がどのような関係にあったかを調べるため、下記を重点的な目的にしました。

- (1) なぜ信仰の山であるこの場所に城が築かれたのか
- (2) 水ノ手周辺のひな壇状の遺構の性格か何か。城としてだけではなく、信仰との関わりはあったか？
- (3) 石積みの構造がどのようなものだったか



土器・陶磁器を復元すると図のような形になります (各地出土品)



3 調査の成果

平場は、盛土による大規模な造成によって築造されていることが分かりました。

平場上からは、建物か柵の一部と考えられる柱穴が見つかっています。また、16世紀前半の中国産青磁碗・白磁碗、17世紀前半の瀬戸・美濃地方の陶器、土器の皿・鍋、鉄釘などが見つかっています。

平場の前面に築かれた石積みは、高さが1.5～2mほどであったこと、崩落を防止するため、まず土台となる石をしっかりと据えてから積み上げていること、石積みの背後にも、もう一列石を積んで、補強していることが分かりました。また、山辺谷の桐原城や山家城(中入城)の石積みほどには、平らな石を積むことへの徹底が見られません。大きな石を配置する部分など、やや異なった特徴も各所で見受けられます。

虚空蔵山城跡の石積みは、小笠原氏の城と同じように、技術的には未発達なもので、松本城のような石に勾配をつけて積み上げ、背後には排水を良くするための栗石(ぐりいし)を詰めた本格的な石垣とはまったく異なる技術によるものです。

そのため、石を高く積むことができず、今回の調査地点では、石積みより下側を土の slope にすることで見かけの高さを確保しています。

